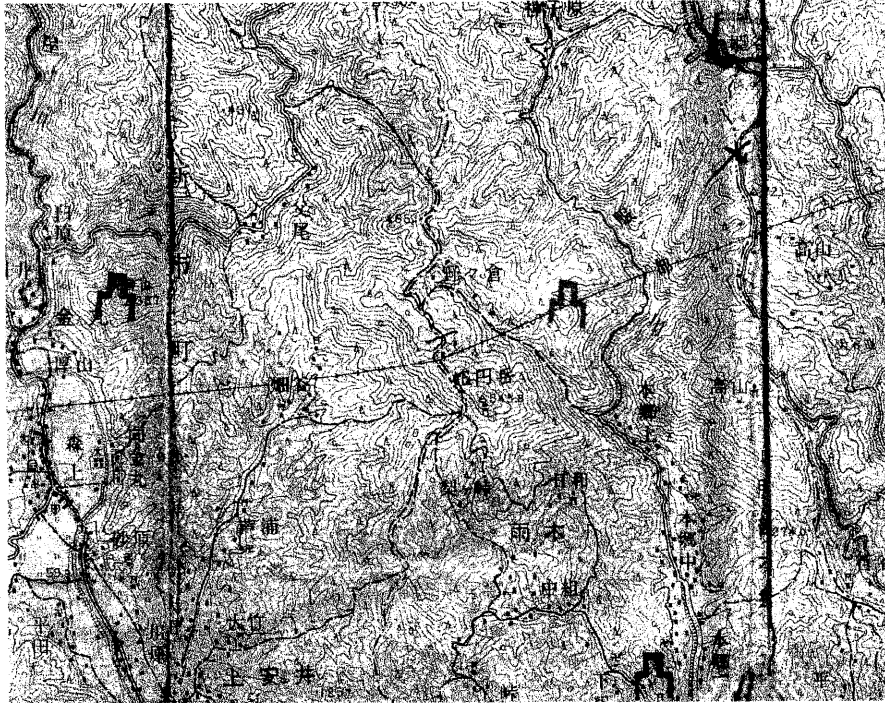


備陽史探訪の会 2月徒歩例会

野呂往還を歩く 第2弾

平成 25 年 2 月 17 日実施 講師 田口義之会長



昭和 46 年発行の 1/50000 地図

今回の目的

- 1、父尾銀山跡から蛇円山までの野呂往還の踏破
- 2、廃村となった野々倉集落の現状
- 3、原城址、梶原屋敷址、和田屋敷址の調査



備陽史探訪の会 事務局

〒720 - 0824 福山市多治米町5 - 19 - 8

TEL&FAX 084 - 953 - 6157

E-メール info@bingo-history.net

公式ホームページ

<http://bingo-history.net>

『服部の歴史』(摘要)

岡田逸一著

蛇園山案内

天高く馬肥ゆる秋のころが、蛇園山に登る一はんよい時です。それほ空が清くすみわたり、遠方の景色がよくながめられるからです。

蛇園山は、はるか南方からながめると、その山の形が大へん富士山によく似ているので、一つに備後富士とよばれています。頂上から四方を見ると、ながめが非常によいので、遠近からの登山客が年々増えています。

登る道ほ、いくらもありますが、本郷から登って、雨木に降りるのが最も楽なようです。先ず本郷を北へ北へと進んで、栗屋平兵衛の墓に参ります。お墓は寿利の基地にあります。一番大きな墓は平兵衛の両親の墓です。平兵衛の夫婦の墓は以外に小さなのに驚かされますね。この理由は皆さんすでに読まれましたね。

この基地から三百歩進むと、八幡岳の下にきます。蛇園八幡宮の跡は、大きな岩の下です。さらに百歩進むと、本郷川の砂止めが見えてきます。ここから百歩ばかり行くと、本郷川の東岸に、アンチモニー鉱山があるのです。この鉱山から、さらに百歩ばかり行くと、昔の金山奉行所址、女郎屋敷跡があり、小山の森の中には金山神社が祀られています。

蛇園山に登る前に、まず原の城跡を訪れましょう。八幡岳のすぐ北にある原の開墾地に登る新道を行けばいいのです。この新道路の左右に珍しい植物がありますから、植物採集をして登ると結構ですね。さあ開墾地に着きました。ここが鎌倉時代の梶原屋敷址であり、和田屋敷址でもあるのです。鎌倉時代の礎石や、五輪墓や、陶器の破片などが出ています。この開墾地の南方の山頂が、備後の最初の守護であった梶原平三景時、土肥次郎実平がきずいた、「原の城」の址です。備後を治めた人が、本郷に住んでいたことは大変面白いことです。ある人は「本郷」という地名は、長官がいたところの地名であるといっています。原城址には、礎石らしいものもあれば、井戸のあとらしいものもあります。この城址には近頃山神さんが祀られました。私はこの神殿に、開墾地から掘り出された五輪墓を納めました。

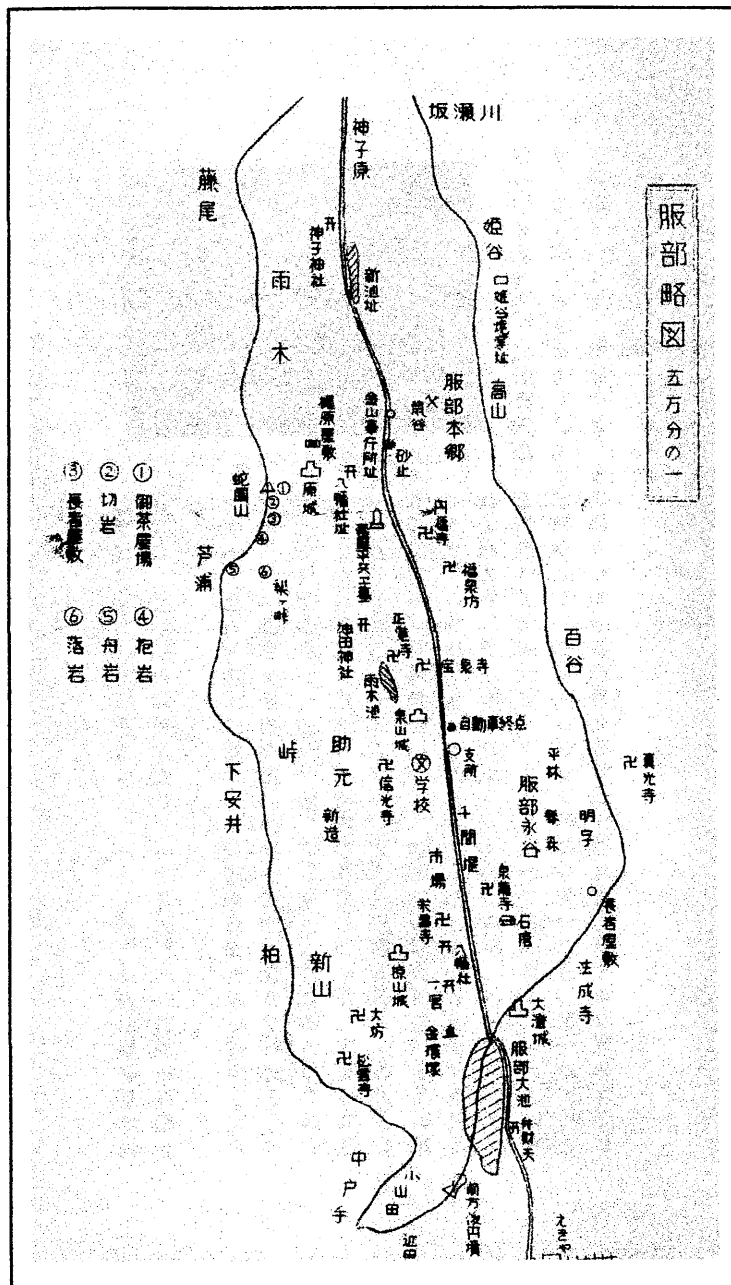
この城址から、野々倉を経て、蛇園山の御茶屋場に出ます。江戸時代に福山の殿様がおかごで蛇園山にのぼり、ここでお茶を飲みながら、四方の景色を眺めたものです。東は備中、西は安芸の国の山々が見えます。はるかに伊予の石鎚山系が、雲の如く、かすんで見えます。よく晴れた日には、北に大山が見えるといっています。ここから絶頂(545メートル)にのぼりますと、タカオカミ神社が祀ってあります。祭神は八大竜王で、雨の神様です。蛇園山を一つに「ぢ玉山」というのは、竜王さんのなまったものではないかと考えています。大旱の時に「雨を降らせてください」と、一心こめて拝むと、忽ち雨を降らせて下さるそうです。もし雨を降らせて下さらない時には、野々倉川の雨坪さんに、ご神体をつけて、一生懸命に祝詞をあげて祈禱すると、必ず雨を降らせて下さるということです。この雨は蛇園山から南の方に雨足をなびかせて降ります。それでこの地方を、雨木と名づけたそうです。タカオカミ神社の神殿は大昔は石造りでしたが、梶原景時が木造の神殿を造ったとのことです。

この絶頂から西へ下り、鳥居をくぐって50メートル下ったところが、女郎屋敷です。ここから更に50メートル下ると「切岩」につきます。花崗岩の大きな岩を切割って、通り道にしたところです。ところが、ここから北方は古生層地帯で、南方は花崗岩地帯で、地質上、はっきりと「きり」がついていることは、大変面白いことではありませんか。この「切岩」から東の方には、烏帽子岩、くぐり岩、赤子岩など奇岩がいくらかそびえ立っています。赤子岩の下方に、長者屋敷址（松本正一氏宅付近）があります。長者というのは前にも記したように宿駅の長でもあり金持でもあったのです。ここに宿駅が設けられた理由は、昔野呂往還（神石郡来見から、吉備津神社に参る道）を通る人が、ながめのよい、ここに一夜の宿をとったからです。

野呂往還を下って行くと、傍らで抱岩があります。ここを通る人が、この抱岩を抱えて、はるかに吉備津神社を祈ると、願い事はなんでもかなえて下さいます。

ここから更に下ると、往還の右側に、舟岩があります。むかしむかし大昔に、八大竜王がこの舟岩に乗って、天下られたと言い伝えられています。この八大竜王を祀ったものが、タカオカミ神社でした。この舟岩は女性を又抱岩は男性をあらわし、それぞれ崇拜されたものかもしれません。

この舟岩から、東方をさして谷を下ると、「落岩」があります。元禄の検地水帳に書き記すことを落としたので、落岩の名が起こったそうです。むかしむかしこれも大昔のことですが、何でも蛇園の竜王さんと、千田の蔵王さんが大喧嘩したそうです。その時竜王さんの投げた石は蔵王山のおもとに落ち、蔵王さんが投げた岩が、山頂まで届かないで、ここに落ちた、それが落岩であるとか。これも



昔の話ですが、この落岩の下に大きな古狸がすんでいました。ある夜和尚さんに化けて、緋の衣をつけ、梨か峠にかえるお百姓さんに「ご馳走がずいぶ重そうですね。持ってあげましょうか」と、大変親切に申しましたので、お百姓が「それではお願いします」と、ご馳走をわたしましたら、緋の衣を着た和尚さんはさっさとご馳走をもってにげてしまったと。この落岩の付近から、松本茂さんは、石斧や石鏃や、須恵式土器の破片を拾われました。大昔からこのへんに、人がすんでいたことがよくわかりますね。

この落岩から、さらに下ると、黄鉄鉱の鉱山があります。そのすぐ下が、大明神さんです。ここを過ぎると、雨木の「谷」にでます。佐藤良三郎さんの造った門前池を眺めつつ岩畳神社に出ます（下略）

『蛇円山風土記』（摘要）

吉岡五郎男著

第四、蛇円山之記

③ 蛇円山

出典、西備名区

往昔、龍山と云びし。或はおろち山とも簸山とも言へり。皆大蛇にかたとるゆえんの名なり。当山、東南は品治郡、北西は葦田郡に跨る。西備南方の大山なり。第一の嶺を八国嶺と云ふ。南に臨めば四州の山々、雲霞の間に見へわたり、北は雲伯、東は備作、西は芸石に及ぶ絶景なり。根廻り五里二十七町（福山志料五里二十七町五十間）、高百八十八間、南の流れ尾、中嶋村平地よりの積もりなり。東麓は本郷、助元、永谷、新山、南は中嶋、近田、戸手、西は新市、安井、常、金丸、北は藤尾なり。峰は雨木村分なり。此嶺に八大龍王御鎮座なり。此山中に大小四斗四社あり。誠に天龍天降ませし神地なるものなり。

（中略）

袖中秘記に、此の山を龍山、又おろち山と言ひ、蛇園山とも云う事は皆大蛇にかたどるゆえんの名とかや。また簸山と云ふは、むかし神の代、此山に大蛇すんで人をなやます。此おろち出雲と備後の堺なる鳥上の嶽に通ひ、其のあたりの人をとれる事多かりし。鳥上の嶽とは、簸の川の川上なれば、それによそへて此山を簸山とも云ふとぞ。此山に祭れる神をば南海龍女にてまします。南海龍女は、奇稻田姫の別名とも申伝ふ。日本書記や（巻第一、神代上、）書日。（中略）

此山、本州の高山にて、北の星の子山、末渡山等皆これに連続せり。これ雲伯の界に至るまで連りて、高嶺幽深の地。此山より北にしたたる川々は、備の中津国に入り、西は安芸、石見に流れ入る。かの鳥上が峯に児が沼というあり。是、簸の川水上なり。神代の巻に八おか八たに、這いわたるとは、此山より、かのかの川上に至れるの間なるべし。己上。

⑥大蛇民話

蛇園山は、天龍の天下り給ひし山、八大龍王をお祭りしてある山、この事から大蛇がおる神の使いのおろちが住んでいるとの民話が伝わっています。たとえば、藤尾のちがい谷へは秋の彼岸から春の彼岸までの冬期には入るな、首をひきぬく（切るのではない）

魔物が出るからだ。これは古老から聞いた話です。相方の城山の大蛇を見た。二升樽程もあった。との話も聞きました。

蛇園山上には、大蛇がいる。七回り半からのトグロをまいている。とは小学校時代に、子供間で話した思い出です。この様な民話を集めてみました。

第一話 西備名区から

此山の東北、北山村の俗諺に言へるは、蛇園の山に今も大蛇あり。これ雄なり。備中猪原山に大蛇あり。これ雌なり。蛇園の大蛇猪原山に通へり。其道定めて尺寸たがへず。其道筋に畠あり。鹿垣（かきのこと）丈夫に結び置に、折々其鹿垣を破り通る。其の穴方二尺計りにして外を損なわず。故に堅く是を結び置に、程経てまた穴ある事前の如し。たまさか山をこへしを見し。今におろちの残種あるかと云ふ。

すべての動物が夫婦生活をし、したい合うという擬人手法に、古人の心を知る、心あたたまるものがあります。

第四、蛇園山古城社

①原古城址

○梶原、土肥並源行家当国所領之事 出典、備後太平記・芸備国郡誌

〔東鑑二巻載〕人王八代安徳天皇寿永二年（1183）二月庚申一日（何のための年月日かわからぬ。二年は福山志料には二年）同十八日丁丑日播磨、美作、備前、備中、備後己上五箇国梶原景時、土肥実平等に遣す。専使可令守護ト云。

○原の城 出典、岡田逸一「服部の歴史」

服部で一ばん古い城です。蛇園の東北で四百二十米の高地に本丸を構え、蛇園山の東肩にあたるお茶屋場に物見櫓を設けたものです。 註 源平争乱の始、土肥実平が、三備瀬戸内沿岸の地に転戦したのは次の項でわかります。

後鳥羽天皇の項

文治元年（1185）乙己二月、平知盛を遣わし、源氏の隊将土肥実平を備前に撃破し、児島を復す。

三年（1186）……中略……六月二十四日己亥、先に源氏土肥実平に命じ備中、備後を経略す。

註 前二項からして、三備の地は土肥との因縁があり、土肥、梶原が守護となって関東から下向して来たのがわかります。そして平家の関係深い頼朝があり、平家の味方の地方牽族、平家残党の配慮から、要害を第一とし野呂往還に近い地点のこの原に城を構えたのです。梶原は早く此地を去りて鎌倉に帰り、後鎌倉での具合悪く、この由縁の地を目指して下向の途中一族みな殺しとなりました。しかし土肥の子孫は永くこの地に栄えた事は、次の項でわかります。

○原 城 出展、芦品郡誌

土肥実平の裔通綱居る。桑田氏の祖と云う。

○土肥和泉守盛平 一に守平に作る 出典、西備名区

初名新三郎 後、和泉守に任ず

土肥氏は次郎実平末葉……中略……或伝説に云。土肥氏は土肥次郎実平備後守護となり、鎌倉左大将家よりの命にて服部に居城し、子孫相續いて服部に居住し、子孫所々に

散在せり（以下略）

○原の城

出典、前に同じ

三島三郎満平土肥次郎実平末葉、小早川美作守則平男。宮氏没落後住居と云。思ふに、天文年中の人にあらず。則平は又太郎正平に六世も前の人なり。満平の末葉の人、宮氏に属せし者なるべし。

（註）原築城論

土肥梶原の両将は、なぜ蛇園山奥の、この辺鄙な、そして交通不便な地を根拠としたのでしょうか。先ず守護の意味ですが、後年頼朝が置いた守護地頭とはちがい、まもるとの意です。この時代平家は屋島に居たのです。備中、備後の南部は平家有力の勢力圏です。特に平家は水島に勝ち、鞆は平家の大根拠地ですから、源氏方としては敵地に乗りにこんだのです。鎌倉の重臣、土肥、梶原の両将をつかわし、この両将は守るに易く攻むるた難い、軍事的理由を第一として、原の地への築城となったのです。

次は、いわゆる野呂往還に近いので、備北との交通の要地であり、平家あての物資をおさえるのに好都合であります。自給の便にも利点があったのです。これが第二の理由です。

更に、原、野々倉、白が峠、梨が峠と耕地が多く、高地農業が発達していたので、食糧自給にも、好都合でありました。これが第三の理由です。

第八、蛇園銀山

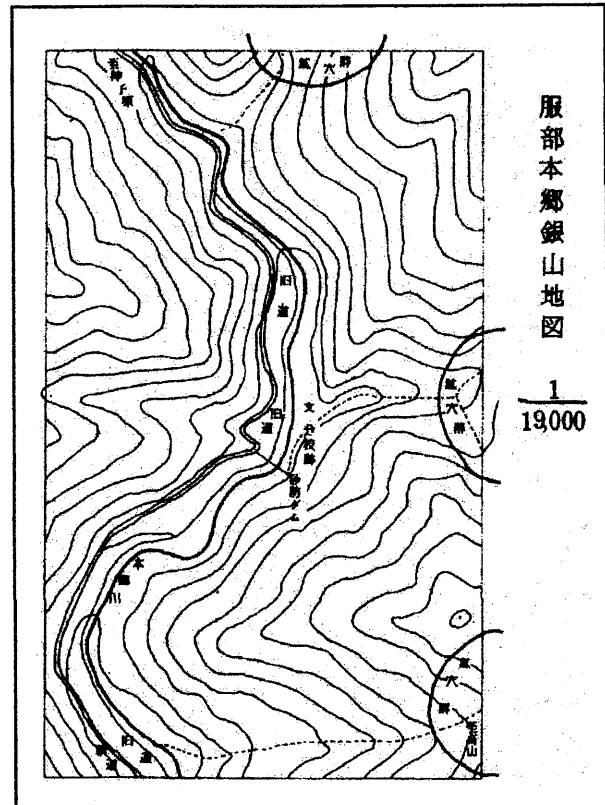
（2）服部本郷金山

（イ）この本郷金山は、駅家町の奥地、服部本郷の家のつまりからもまだ奥にある鼠谷という一帯にあり、所は蛇園山北部であり、父尾鉾山と一連の鉾脈と推定されるのです。

現在砂防ダムの上手に「鉾山奉行屋敷跡」「女郎屋敷跡」の地名が残っています。木立の中に金山神社の祠が鎮座しています。

（ロ）この鉾山は、初期は福山藩の直営で藩財政に大いに期待を掛けられていま

したが、後に民間経営となり、粟屋平兵衛なる者の手に移り、この人は豊かな財力となりました。その豊かな財力で、服部の千間土手を作り、服部川の流れを一定して、美田を作りました。又その豊かな財力故に追放となり、財産没収のうきめとなりました。それは金銀から銅鉾と変わっていましたが、その産出量は可成



あったのです。

銅の産出について、新庄本郷の銅山は、鉱毒水について、下流農民とのいざこざが続きました。服部本郷銅山でも、この鉱毒水の問題がありました。近くは明治年間に、鉱害の報償を経営者に契約せしめた証書を保管している人もあります。

(ハ) 政府による調査 別所技官本省への報告書写

昭和二十五年二月五日 政府の鉱山調査団長である、大阪地質調査所長別所丈吉氏の一行来山され、鼠谷の有望なることを保証された、長文なのでその結論と意見だけを左に記す。

鼠谷には旧坑の配列から見て、志向北五十度東のあまたの含銅石英脈が雁行して潜在していることが推定せられる。毛利侯時代の旧坑は何れも小規模のもので、山肌付近を採掘したものに過ぎず。推定される鉱石の大部分は残存しているであろう。鼠谷は地形急峻で、最も低い掘跡から、最も高い掘跡への比高は二百五十メートルある、従って鼠谷の下底より、北西—南東方向に三百メートルのクロスカットを入れる時は、残存鉱量を把握することができる。これは銅価格の上った時に行う事業で、当面の問題としては、地質精査をなすべきである。

岡田逸一保存

『まぼろしの町 父母市と父尾金山』(摘要)

松村成美講演資料

(前略)では金山の盛んな当時の交通事情はどのようであったのだろうか。標高五百メートルに及ぶ山頂近くに金山の出入り口があり、ここより掘り出された鉱石は五~六十メートルも上に引き上げ、野呂往還を利用して父尾や苔原あたりのタタラまで運んで、そこで石と金とに仕分けしていたものと思われる。苔原や父尾には、タタラ跡や鉱石をふかした溶石の『かなくろ』が実に沢山残っているのである。

金山の上より野呂往還を約六キロメートルほど峰伝いに東北に行くと三和町坂瀬川の柳峠(ヤナギタオ)に出る。現在は国道百八十二号線が通っているが、当時この道は井関に出て出雲街道に通じた道で、井関、油木、豊松方面の人が新市、府中、福山方面に出る時には、この往還を通っていたとの事で、重要な交通路であった。

金山の上をすぐ東の谷に降りると『すみやケ谷』、更に1キロメートル行くと神子原(ミコバラ)に出る。又、北方に降りると2キロメートル程で『苔原舞見』に至る。

金山の上を少し西南に行った東の谷を『風呂の谷』と云う。この谷は干天(ヒデリ)でも何時もきれいな水が流れている。おそらく金山の栄えていた時、労働者の風呂のあった所で、作業が終わってよごれを落とし、疲労をいやしていた場所と思える。

野呂往還は先にも述べたように、坂瀬川の柳峠よりほとんど山の峰を通過して蛇円山の浦「野々倉」に出て、そこより蛇円山の山腹を東側に廻り、「白ヶ峠」を経て蛇円山の南側に出て「梨ヶ峠」より雨木に降って服部本郷に、更に加茂に向かって石州街道に通じていたようである。

※（注）野呂一山の頂上を野呂と云う。

往還一人の行きかえりのはげしい大きな道

方言はどうかは知らないが、今でも年配の人は「往還へ出るな危ないぞ」と子供に注意し、また、「どこの山の野呂へ行く」と言って私達の地方では今でも「往還」とか「野呂」と云う言葉をよく使用している。

また『野々倉』から谷川伝いに下がって服部本郷の奥に出る小路もあるが、『野々倉』より西に『水ヶ窪』と云う大きな谷を五百メートル程降りると、大平往還と云う道がある。この大平往還は蛇円山の北側中腹を西南に向かって横切り、『芦浦』の奥端の大平に出る。ここより父尾の『向山』南側の頂上を塞ノ峠（塞の神とも云う）に出るが、ここより道が三方に別れ、其の一方は、『芦浦』に下りて『渡り上り』に、一方は、山の中腹を廻って向金丸や常と云うところに出る。もう一方の道は北に向かって『神谷坂』（コウゴンザカ）の谷を下ると父尾に出る。塞ノ峠より父尾の家のある所まで約三百メートル程。降りた所の家が『下ケ市』と云う屋号が付いている。

大正三年に現在の小林区より井関に通じる県道（昭和五十年頃までは林道）が出来るまで、父尾から、新市、府中、福山方面に行くには、この神谷坂を上り、塞ノ峠を越える道が唯一の幹線道路であったのである。

野々倉より野呂往還を東北へ約百メートル金山の方に行った所に、西南に向かって降りる道がある。この道は『正安寺』と云う窪を通過して『水ヶ窪』に出る。同じく野呂往還を三百メートル程行った所を南に『七曲り』と云う谷を下ると『水ヶ窪』の下で大平往還に合流している。

これ等の道はいずれも鉱石を運び出した主要な道であったことは間違いない。これ等の道の途中には何仏が祀られているのか小さな石の地藏墓が随所に点在している。

『水ヶ窪』の合流点を大平往還に向かわずに『カヤベ』という谷を四百メートルほど降りると丁度、そこが父尾部落の中央部、新町、喜三町と云う所である。

片や大平より『寺ノ上』と云うところを通過して父尾に下りると田町と喜三町の中程に出て来る。この他、野呂往還の途中より『一里谷』と云う谷を通過して市町に出る道、また、東の方にも北山や神子原、姫谷等へ通ずる道があったが、現在では野呂往還、大平往還を始め各道路とも荒れはて、営林署の作業員やハンターなどが時折り通るのみで、昔の面影は殆んどなくなり、所によっては、通行不能の場所もある。しかしながら、塞ノ峠、大平、野々倉、赤瀧などの往還の主要交差点には、金山の盛んであった時建てられたのか、今でも道しるべの大きな道標が五、六ヶ所残っているのが唯一の名残である。

昭和五十八年春、県道小林区、井関線の父尾部落より少し上の赤瀧橋の所より、金山のすぐ下、『横合』を通過して『千人塚』の少し野々倉寄りを、野呂往還を横切って『スミヤケ谷』から神子原に通ずる約四メートル幅員の林道が開通した。この事によって近き将来、父尾の金山の全貌も明らかになり、色々の面で脚光をあびる時の来ることを期待している。

野々倉について

蛇円山の東北、野呂往還のすぐ南側に野々倉と云う所がある。ここは父尾の金山の栄えていた当時に、出先倉（俗に云う野倉）を置いて役人が常住していて、金山の管理に当たった所で、金山の労働者の賃金を保管したり、これらを労働者に支払い、また各所の『たたら』で鉱石をふかして金にしたものを、一時この野倉に収納し置き、出荷する出先倉であったと思う。野の倉が『野々倉』の地名となって残っているもので、昭和二十年頃までは十数戸の民家があったが、一戸、二戸と次々に駅家や福山等に転出されてしまい、今では一戸もなくなって荒野と化し、お堂と荒神社のみが淋しく残されている。

舞見について

野呂往還を金山の上より柳峠の方に少し行った所と、別に約1キロメートル行った所の2か所から苔原と云う藤尾の滝の奥の小さな部落に降りる道がある。その昔、金山の栄えた時代には『タタラ』で大変繁盛した所と思えるが、何の記録も言い伝えも残っていないが、ただ部落の中央に地神社のある川向こうに大きな五輪塔がある。

言い伝えによれば金山の役人で大金持ちをお祀りしたもので、墓の下には沢山の宝物を埋めてあると云う噂で、丘の横に穴をあけた跡が見られる。その苔原のすぐ奥に『舞見』と云う所がある。地形は三方が山で、裾はゆるやかな斜面となっていて、一方は川（現在は藤尾ダムとなっている）に面し、中央部は平らになって野球場を小さくした様な恰好をしている。（今では、新市町がキャンプ場を作っている。）昔からの言い伝えに、金山の栄えた当時にこの舞見の土地に能舞の舞台があって、金山で働く者の娯楽の場所であったとの事である。金山がなくなってから急にさびれ、その後四戸が舞見に、五戸が苔原に残って農林業に従事していたが、昭和四十年に苔原に藤尾ダムが出来て全戸立ち退き、福山や新市の方面に出られてしまい、今は一戸の家もない。

女郎屋敷について

金山のすぐ上方の野呂往還を横切って、『スミヤケ谷』に降りると、神子原の麓の端で服部県道に出る。そこより川沿いに1、5キロメートル程下つた川向こうに『女郎屋敷』と云う所がある。（元服部小学校の分校があった上方。）現在も屋敷跡と思える地所が山の斜面に残っているが、草木に覆われ林となって、中々捜しにくい。

又、『水ヶ窪』を降りカヤベの下の父尾にも1ヶ所あったとの事、昔の金山に付きものの労働者の慰安の場所であったのだろう。今でも此の所を女郎屋敷と呼んでいる。

寺院と神社について

高麗神社の御由緒調査書を作成された口屋町の高橋寛氏は長命で、昭和三十年九月に九十歳で亡くなられた。

大変に聡明な方で、特に歴史や郷土の昔の物語などよく話しておられたが、その話の中に、父尾金山の栄えていた時には、この藤尾の郷には七ヶ寺をもあったと語られていたが、当時の私は若くもあり、寺への関心もあまりなく、今にして思えば、よく聞いて色々な事を尋ねておけばよかったと今さらながら悔まれる。

此の藤尾の土地に最後まで残っておられた下租の泉正寺も最近の過疎化の波に追われ昭和五十七年に福山市駅家町中島に転出されて、ついに藤尾の郷には1ヶ寺もなくなってしまった。

服部本郷にある福泉坊も金山の栄えていた時には藤尾の地にあり、金山の上より野呂往還を約1キロメートル東北に行った所から苔原に降りる辺りを、寺峠と今でも云っており、この他に福泉坊があったのである。この寺の住職に尋ねたところ、寺の記録に、「福泉坊十代、善性住職の代、文亀年間、藤尾の地より本郷村に移し、ぬのめ瓦にて建立す。後柏原天皇の御代なり」と書き残されているとの事である。

其の他に、寺の名の付いた地名が残っているものを記して見るが、何処にどの様な寺があったのか全く判明しがたい。

前述の野々倉から野呂往還を約百メートル東北に行った処より、水ヶ窪に降りる谷を正安寺跡と言う。南に向いた日当たりの良い平坦な窪である。また、大平の道標の所より北東の父尾に面した小高い丘がある。この処の名を寺の上と云う。どこかこの丘の下に寺があったのだろう。

更に、高麗神社の西北約三キロメートル離れた処に五郎寺と言う地名がある。また、北東に小さな窪をへだてた小高い丘に寺屋敷の名があるが、現在では松林となつてはいない。少し平坦な場所があるので、その気で見れば屋敷の跡ではないかと考えられる。他にも堂屋敷とか堂之端の屋号の家もある。いずれにしても、寛正三年の大火によって焼失したものなのか、それとも他地区へ転出したものなのか、(下略)

原城と野呂往還 (大陽新聞連載 田口義之「新びんご今昔物語」より)

福山市の北郊、駅家町服部本郷の奥まったところに、「原城」と呼ばれる中世の山城跡がある。

そこは、備南の最高峰、蛇円山の東北、野々倉の谷を挟んで相対する標高四百五十メートルの峻険な山頂で、到底人の常住する場所ではない。

岡田逸一著『服部の歴史』では、「源頼朝がこの地域を治めるために梶原景時と土肥実平に築かした」この地域で一番古い城という。

近年刊行された『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第3集によって、いままで茫漠としていたこの城の様子が明らかになってきた。それによると、城は3つの部分にわかれ、今まで「原城」とされていた場所は東南に突出した尾根に築かれた出丸で、城の中心は、「梶原屋敷」と呼ばれていた鉄塔の建つ山頂部にあったことが分かった。

縄張り図を見ると、本丸(伝梶原屋敷)は三段の曲輪で構成され、西北の尾根続きは堀切で断ち切られている。原城と呼ばれる東南の出丸は、同じく三段の曲輪で構成され、本丸と出丸の間には連絡用の小さな曲輪が築かれている。

山中の孤立した城郭に見えるが、生活の痕跡は比較的豊富である。『服部の歴史』によると、出丸(同書では本丸)には礎石や井戸もあり、本丸(梶原屋敷)からは、開墾にともなって石造五輪塔や土器の破片が掘り出されたという。

遺跡から見る限り、鎌倉初期の築城という伝承は、承認しがたい。梶原、土肥氏は関東武士であつて、「平場の合戦」は得意としていたが、峻険な山城を構え拠点とすると

いうやり方は、彼等の後裔が鎌倉時代末期になってやっと会得した方法である。築城はずっと下って、室町時代の後期（十六世紀のはじめ）としていいだろう。

梶原、土肥氏といった鎌倉武士の本拠として築かれたものでないとすると、築城目的は別にありそうである。

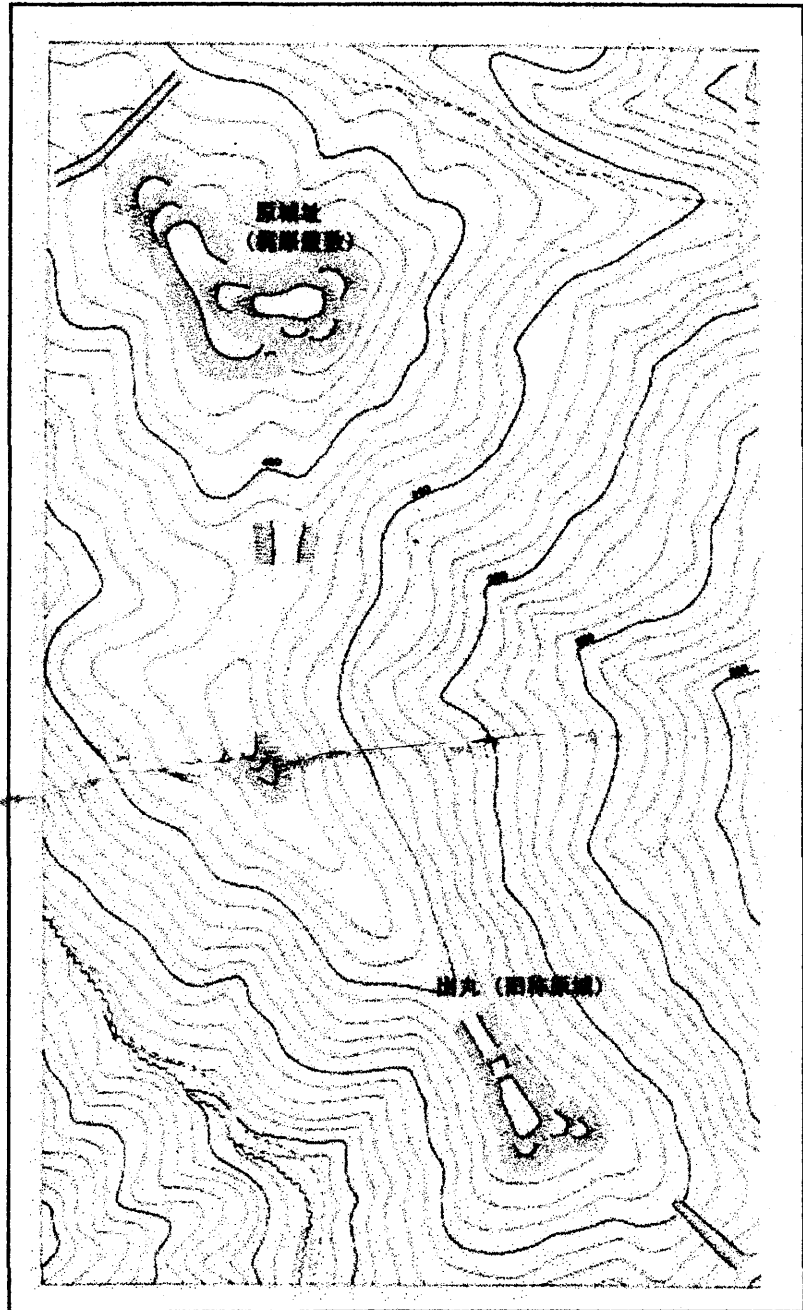
その役割として考えられるのは、銅山の守護と、「野呂往還」と呼ばれた尾根道の確保である。銅山は、城山から服部川を挟んで東に位置する「鼠谷」にあった。起源ははっきりしないが、戦後まで探掘された記録があり、位置的に見て、城はこの銅山を意識して築かれたと見ていい。

また、「野呂往還」との関連も見逃せない。「野呂往還」は城跡北方の坂瀬川（神石高原町）から蛇円山の西肩をかすめて、新市町の柏に至る尾根道で、一説には原城から蛇円山を挟んで西に位置する「藤尾银山」の銀を運んだ道とも言われている。

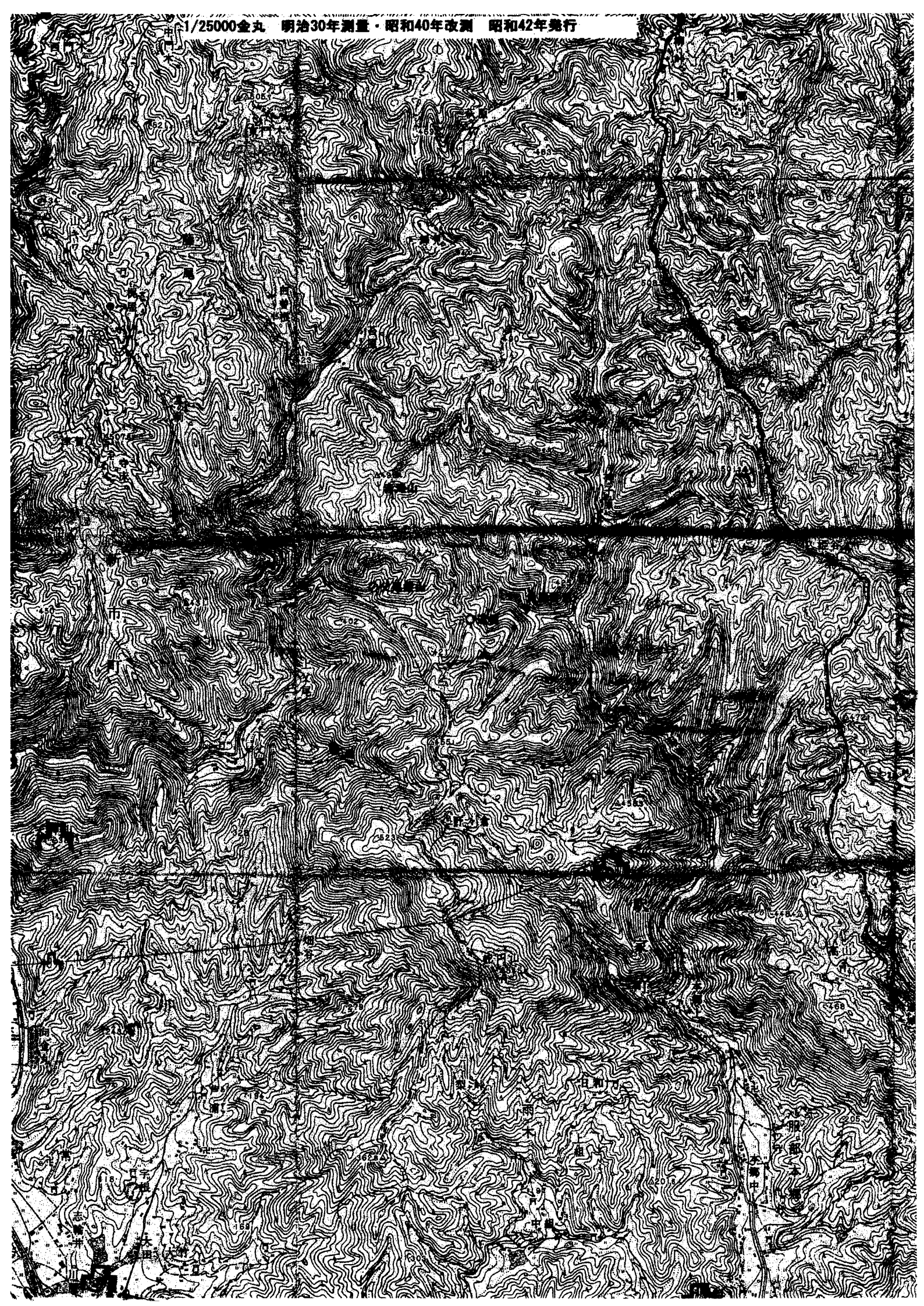
一般的に、近世の往還が平野沿いに通っていたのに対し、中世は「尾根道」の時代と言われる。尾根道は手間隙のかかる橋梁を必要とせず、維持が容易であったからだ。

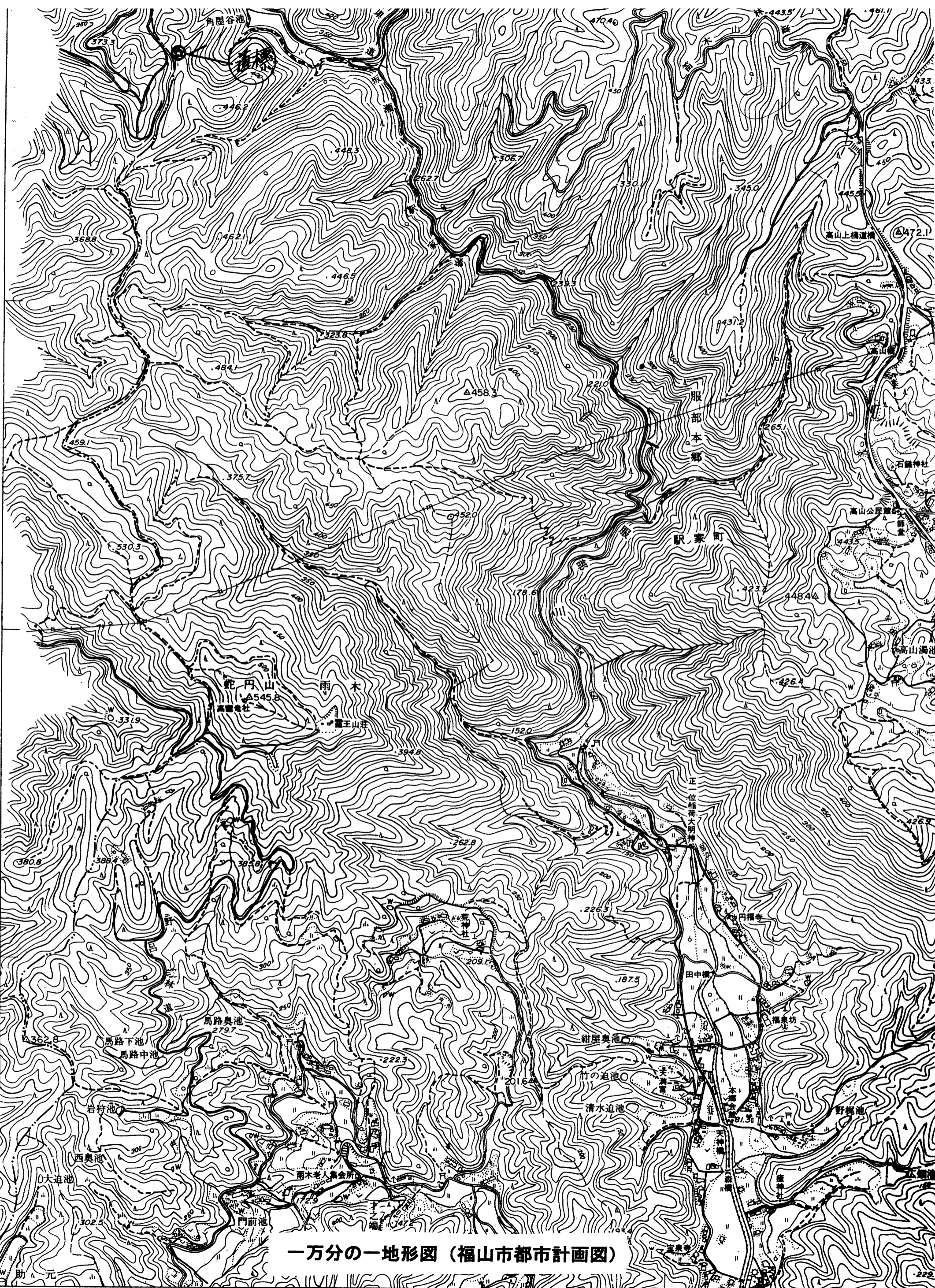
城跡の西方に今は廃村となった野々倉がある。

野呂往還を中心とした尾根道は、この野々倉で交わり、四方に通じていた。城は、この野呂往還を押さえる使命を負っていたと考えて良いだろう。野呂往還は、中世備後最大の勢力を誇った宮氏が南北の通路として利用した道であった。原城も宮氏が築き利用したと見て間違いあるまい。



1/25000金丸 明治30年測量・昭和40年改測 昭和42年発行





一万分の一地形図 (福山市都市計画図)

15600
103